被災地からの報告「被災地の今、そして支援活動のこれからを見据えて」

末永　克（つよし）さん（NPO法人ぐるっと　理事・活動統括者）

１）石巻から車で３０分程の距離にある大崎市鹿島台という所に住んでいる。昨年の３月１１日、揺れが長く続いた。宮城県は地震が多い。震度６程度の地震はこれまで３ー４回経験している。３月１１日の揺れはそれまでとは違っていた。外に出ると信号機のシグナルが全て消えていた。踏み切りの遮断機も下がりっぱなしであった。電気は１週間、水道は３週間止まったままであった。この間、情報がなかった。そして電気が通じてテレビを付けると原発のニュースが繰り返し伝えられていた。

被災現場の様子を知りたかった。しかし車のガソリンが手に入らなかった。震災後、氷点下の寒さの中でガソリン補給のために車の中で待っていて、凍死した人がいた。（待ち時間は１２ー１４時間、その間ガソリンを節約するためにエンジンを止めていた。）　次に、いつどんな余震が来るか分からないので、避難するためにガソリンをなるべく取っておくということが、４月初めまで続いた。

３月３０日に片道４時間かけて東松島市の大曲海岸まで行った。津波によって全てが押し流された情景を目の当たりにしてひざまずきその場で泣いてしまった。３ヶ月間水が引かず、遺体の調査もできなかった。津波の被害の凄まじさを感じた。阪神・淡路対震災の体験を生かしてという人がきたが、被災地の現場を見て考えが甘かったと言った。地元の者の視点と、外から来た者の視点の違いを実感させられた。阪神淡路大震災の時の１週間は東日本大震災の東北の３ヶ月くらいではないか。

２）被災地に外から訪れてくる人たちの発する言葉に違和感を感じていた。その中で唯一まともな話ができたのは渡辺真一さんだった。この人の属している団体なら大丈夫だと思って、泥だしのボランティアに参加した。

ボランティアの人たちの思い、高さはその人によってすべて違っている。それは行動に現れる。東北の被災地の人たちはボランティアに来てくれた人たちに「ありがとう」という。しかしそれはボランティアへの歓迎の思いとは限らない。人が手伝いに来てくれたら「ありがとう」とは誰もが言うだろう。けれどそれと受け入れる気持ちがあるかどうかとは別である。被災地の人たちもボランティアの本音がよく分かるようになる。

何のためにボランティアに来るのか。ボランティアとはそもそも何なのか。そこがあいまいなままになってしまって今も続いている。被災地に行っても写真を撮るなと言われる。けれど今思うのは、「なぜあの瞬間の写真を撮っていなかったのか」ということである。あの地震と津波のときのことで写真に撮っておいて見えるものがあったはずだと思う。写されたものがないから、何も伝えられない。自分でも振り返ることができない。

現地の人と現地でない人との認識の違いを感じる。

ボランティアはというの、その家の人がやってほしいと言って、はじめてやるべきことであって、勝手にやるものではない。家の人が倒壊してしまった家をみて茫然としていた。そこにボランティアが来て「手伝いましょうか」と言ってくれる。家の人は片付けてもらって、自分たちもやろうと思った。しかしだんだんとおっくうになっていった。

３）２０１１年７月中旬頃から、ボランティア希望者にボランティアをする場所を見つけてほ

しいということが言われ出した。ボランティアのためにワーク先を探し回るということが起こっていった。いったい何のためのボランティアなのか。

福島県南相馬市小高区浦尻を最近訪ねた。津波よって水に浸かり、いまだに水が引いていない。震災後自衛隊が入り排水作業行った。この地区の排水を完了するには８週間必要と言われたが、自衛隊は作業を２週間で切り上げ、他地区へ移動した。その浦尻を訪れた。風向きが変わって死臭がした。恐怖を感じた。小高区に住んでいた人たちは、少なくともこれから３年住むことはできないと言っている。その小高区にボランティアを入れる意味はない。そこでこれから生活することが見通せるなら意味があるけれど・・・・。

津波の被害を受けなかった人が放射能を心配する。南相馬市原町区萱浜（かいばま）に津波で子どもが流され見つかっていないからと留まっている人がいる。自分の家があったところに毎日車で来てじっと見て帰って行く。もしかしたら今日は帰って来ているんじゃないかと思って見に来ているのだという。家族が亡くなって遺体が見つかっていない人は、昨年の３月１１日で時計は止まっている。そういうことを知ってほしい。

なぜそこまで深く踏み込んで行かないのか、「どうしたんですか」と問いかけるだけでいい。話したくない人は話さない。話す言葉をずっと聞いているだけでいい。それが心を動かして復興に向かう。心が動かなければ、復興に向かえない。

緑風会のチーム小平というボランティアグループは、材料をすべて被災した現地で購入して、仮設住宅で一緒に餅つきをした。餅つきが終わったあとで、「これから何をしたらいいか」と問われたので、一ヶ月後何ももたなくていいからまた来てほしいと伝えた。一ヶ月毎にに彼らはやって来た。仮設の人たちと自然と話が広がって、夏祭りをしようということになった。自然発生的にそういうことが起こっていく。「一ヶ月後に来てほしい」と言われた言葉の意味が分かったと彼らは言った。

４）石巻市の被災家屋は２５００戸。そのうち１７００戸が南浜町に集中している。石巻市の中でいつばん手のつけられていない場所である。車が放置されていることが少なくない。車は不動産であり、持ち主の許可なしには動かせない。持ち主がいない、持ち主が車の中で亡くなっている場合には、所有権が移った人の許可が必要となる。そのため処理できない車が山積みにされ、大量にある。こうしたことを片付けるための法律整備の方が先行的に必要である。

被災地では地震による被害はほとんどないと言ってよい。津波による被害が神甚大である。ゴミの回収が行われない。金目のものをほとんど盗まれた家もある。草は放射能汚染のため抜くことができない。やれるのは家の中の片付けであるが、片づけても家の中に置くしかない。

５）福島では、避難区域の指定が解除されると、持ち主が自分で処分しなさいと言われる。放置された車は何バープレートを外して持ち主が分からないようにして放置するケースも少なくない。

６）石巻栄光教会の夏祭り実行委員会が開かれたとき、長田センターから、今年は地元の人が主体になってやってほしいとの提案があった。しかしやっと家の再建の目処がついたという状況で、なぜ地元が中心になってやってほしいと提案するのか。現地を見ないでなぜ言うのか。

とにかく「来てくれ、見てくれ、聞いてほしい」。カルテを見ないで診療する医者がいるなら信用されない。一部を見て全体を推し量る愚かさを思う。今は東北だが、同様のことは日本のどこででも起こる。

７）女川町は一番高い津波がきたところである。42.8 メートルの津波が来た。４階建てのビルの上に車がひっくり返って乗っていた。巨大な瓦礫の山が１キロも続いている。瓦礫を見ると震災とことを思い出してつらい。
人間いできることはこれっぽっちしかない。人間は無力である。いのちはこんなに簡単になくなってしまう。その感覚が大事。謙虚になって見て、聞いてほしい．そうすればやることが見えてくる。人の話を聞いて深くつながっていくということがなかなかできない。見ていて歯がゆい、「それは違う」とうことがボランティアには多い。

エマオの人たちは東北弁の微妙なニュアンスが分からない。「被災者」「被災地」というフィルターをとってほしい。興味本位で聞くと失礼になってしまう。エマオがボランティアを派遣する先は限定されていて、行った先の方たちが話すことに疲れてしまっている。つながりの広がりに欠けている。話したことがない人の所に行って、話をすべきである。
８）昨年１２月１６日に政府は福島第１原発の原子炉が「冷温停止状態になった」と発表した。なぜ急いだのか。批准している国際基準において、年間被曝量を１ミリシーベルト以下に下げるための段階として冷温停止状態を言わなければならなかったからであろう。